

稲作のようす

1 日本の稲作

米づくりは日本の農業の中心となっており、日本の耕地面積の約半分が田である。また農業全体の産出額でも、米は大きな割合をしめている。

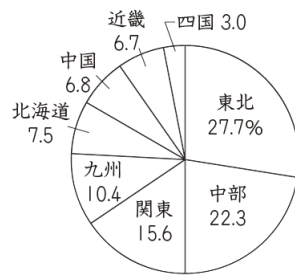
<米づくりのさかんな理由>

- ①田植えをする時期が梅雨（雨が多い）となり、稲に必要な水が十分得られること、また夏には気温や湿度が高いことなど、日本の気候は稲の生育に適している。
- ②米は昔から日本人の主食としてさかんに生産されてきた。
- ③米は日本人の大切な主食なので、国（政府）が生産者から米を買い入れ、消費者に販売する制度（食糧管理制度）をとり、農家を保護していた。

2 稲作のさかんな地域

東北地方や北陸地方では冬の寒さが厳しかったり雪が多かったりするため、冬の間はあまり作物をつくることができない。そのため米の単作（同じ土地で1年に1種類だけの作物を作る）が行われている。全国で生産される米の半分近くがこれらの地方で生産されており、全国に出荷されているので、これらの地方は日本の米ぐら（穀倉地帯）とよばれている。

地方別の米の生産量割合



(2016/17年版「日本国勢図会」より)

稲作のさかんな地域



3 稲作をめぐる問題

<米の生産調整>

生産技術の進歩で同じ広さからとれる米の量が増える一方、食生活の変化で米の消費量が減っていき、米が余るようになってきた。あまる米を減らすため、国は1970年から米の生産調整を行い、作付面積をへらして生産量をおさえる減反政策を進めた。

<転作>

水田での米づくりをやめて、麦や豆などを作ること。

<休耕>

作物づくりをやめて、耕地を休ませしておくこと。現在はおこなわれていない。

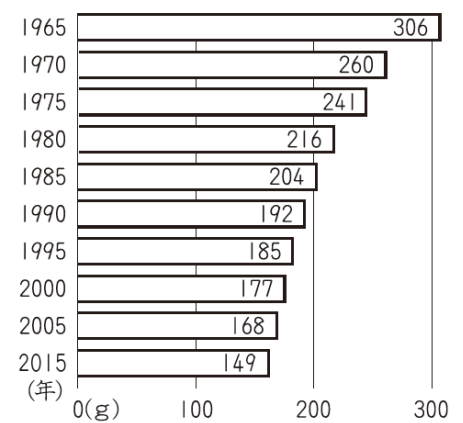
<食糧管理制度の見直し>

政府が米を農家から高く買い上げて安く売る食糧管理制度は廃止され、農家が政府を通さずに米を消費者に売ることがみとめられた。

<米の輸入自由化>

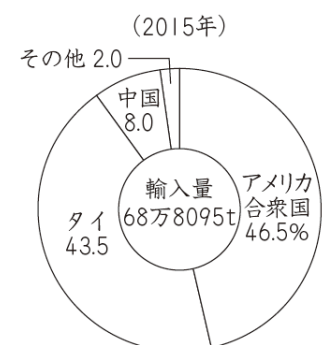
米は日本の農業の中心なので、国は、米の輸入を制限して、国内の農家を保護してきた。しかし世界で貿易を自由に行おうとする動きが強まり、1999年より輸入される米に税金をかける（関税化）ことにより、米の輸入が自由化された。

日本人1人1日あたりの米の消費量



(2017年版「日本のすがた」より)

日本の米の輸入相手国



(2016/17年版「日本国勢図会」より)

2 畑作のようす

1 日本の畑作

畑作は、おもに台地などの水の便がよくないところで行われている。北海道・関東地方・九州地方南部などでさかんである。

2 野菜づくり

特色のある気候を生かしてほかの地いきと時期をずらして栽培すると、野菜を高い値段で売ることができるので日本の各地でいろいろな工夫がされている。

<促成栽培>

比かく的温だんな地いきで、ビニルハウスなどを使って、自然にできるより早い時期に出荷する栽培方法。(ピーマン・きゅうり・なすなど) 高知平野や宮崎平野がさかんで、おもにカーフェリーやトラックで全国へ出荷している。

<抑制裁培>

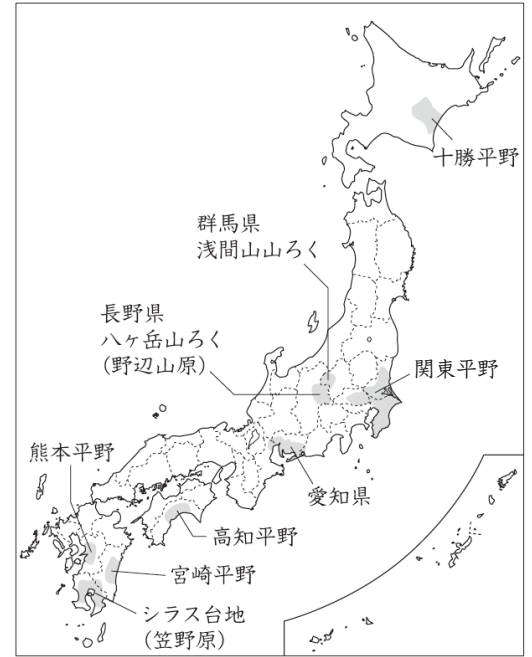
高原などで行われる、夏でもすずしい気候を利用して、自然にできるより時期をおくらせてつくる栽培方法。(レタス・キャベツ・はくさいなど) ハケ岳山ろくの野辺山原(長野県)、浅間山ろくの嬬恋村(群馬県)などでさかんである。

※はくさいの生産量 895t 茨城 26% 長野 25% 北海道 3%

<近郊農業>

大量に野菜が消費される大都市に近い地いきでは、野菜を新せんなまま早く運ぶことができることなどから、野菜や草花の栽培がさかんに行われている。東京・大阪・名古屋などの大都市の周辺。特に千葉県、茨城県、埼玉県、愛知県などでさかんである。

畑作のさかんな地いき



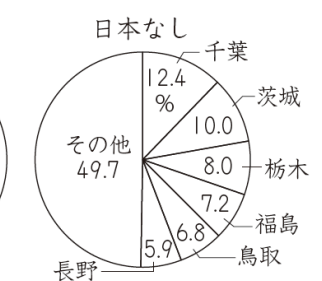
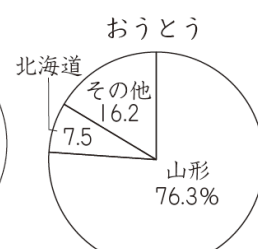
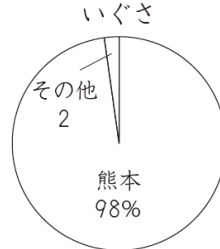
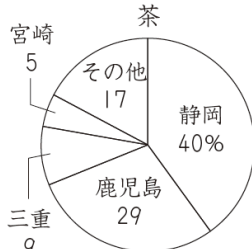
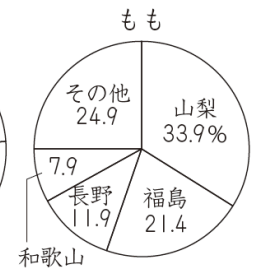
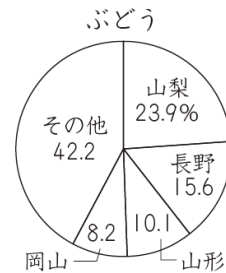
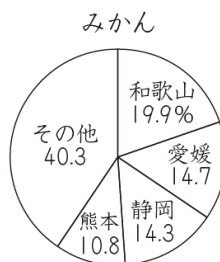
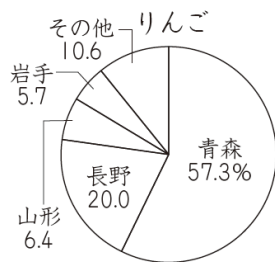
3 くだもの・工芸作物づくり

りんご…すずしい気候で、かんそうした土地に適している。

みかん…あたたかい気候で、日当たりのよい土地に適している。

ぶどう…水はけのよい、盆地の周りの扇状地などで栽培がさかんである。

茶…水はけのよい台地などでさかんに栽培されている。



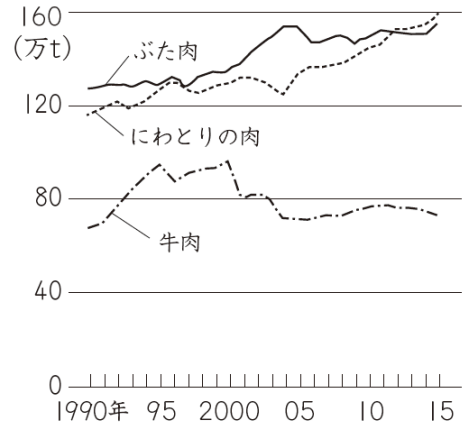
3 ちく産のようす

1 日本のちく産の特色

牛、ぶた、にわとりなどの家ちくをかうことをちく産といい、それによって得られる農作物をちく産物という。

日本は土地がせまく、牧草地にめぐまれないため、ちく産の経営規模はアメリカやオーストラリアなどのほかの国より小さくなっている。飼料（家ちくのえさ）の多くを輸入にたよっている。ちく産がのびるとともに輸入量がふえてきている。

肉類の消費量



(2017年版「日本のすがた」より)

2 ちく産のさかんな地いき

<北海道>

北海道は気候が牧草の生育に適しており、広い牧草地が確保できる。根釧台地は、やせた火山ばい地で夏でも気温が上がらず、農業に向かない土地だったが、第二次世界大戦後に大規模な開たくがすすめられ、パイロットファームという実験農場や新しく農村がつくられ、らく農地帯に生まれ変わった。

<南九州>

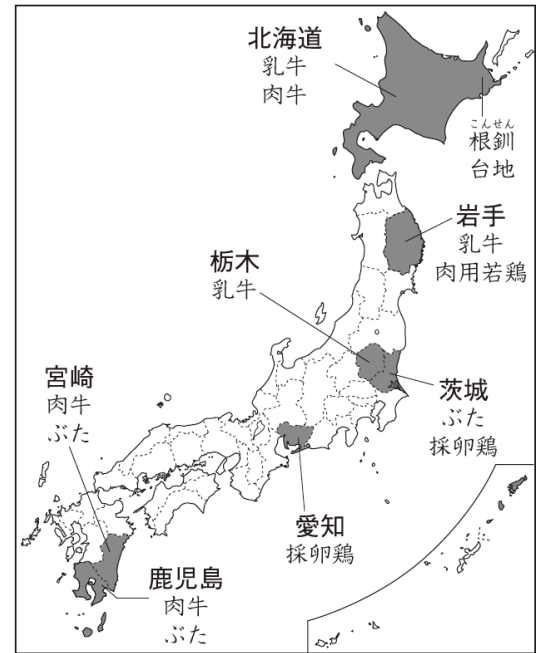
阿蘇山、霧島山などの火山のすそ野では、昔から牛（肉用牛）や馬の放牧が行われてきた。

鹿児島県は、ぶたの飼育数が全国一である。また、ブロイラー（肉用若鳥）も鹿児島県と宮崎県が全国有数の生産県となっている。

<大都市周辺>

都市に近いため新せんな牛乳やたまごを供給している。家ちくのはいせつ物などによる悪臭や河川のよごれが問題となるちく産公害がおこったところもある。

畜産のさかんな地いき

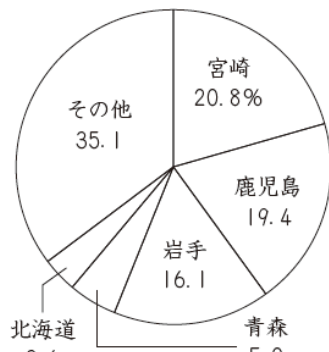


3 日本のちく産の問題点

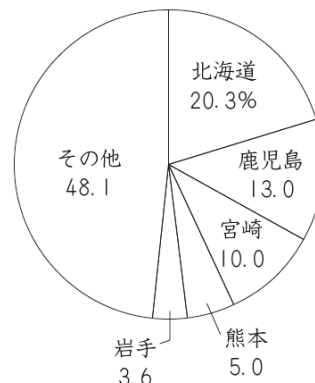
飼料の多くを輸入にたよっているため、生産費にしろる飼料費の割合が高くなっている。資金負担が大きいため農家の数はへってきている。安い輸入ちく産物に対抗するため、経営規模を大きくして一頭あたりの生産費を安くする努力が行われているので、農家一戸あたりの家ちく数はふえる傾向にある。

1991年から牛肉の輸入が自由化され、外国から安い牛肉が輸入されるようになって、ちく産農家は大きな打撃を受けた。

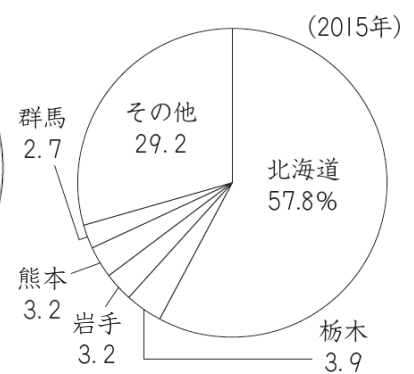
肉用若鶏の羽数割合



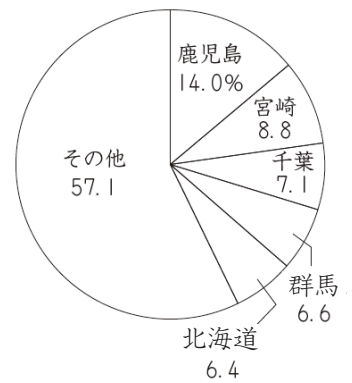
肉牛の頭数割合



乳牛の頭数割合



ぶたの頭数割合



4 農業生産を高めるくふう

1 耕地の拡大

<開たく>

あれ地や森林・原野を切り開いて、田畑にすること。根釧台地の開こんや瀬戸内海沿岸のだんだん畑など。

<かんたく>

浅い湾・海・湖などに堤防をつくり、水をくみ出してほし上げ、耕地（田や畑）をつくること。八郎潟・児島湾・有明海など。

<うめたて>

海や川などを、多くの土やすなでうめて陸地をつくること。

2 耕地の改良

<湿田の改良>

水はけが悪い水田（湿田）に排水路や用水路をつくり、水はけをよくして乾田につくりかえている。越後平野や輪中地帯など。

<客土>

水はけが悪い、栄養分が少ないなどで作物作りに向かない土をとりのぞき、かわりに肥えたよい土をいれたりして作物がよく育つ耕地に作りかえること。石狩平野のいで炭地など。

<耕地整理>

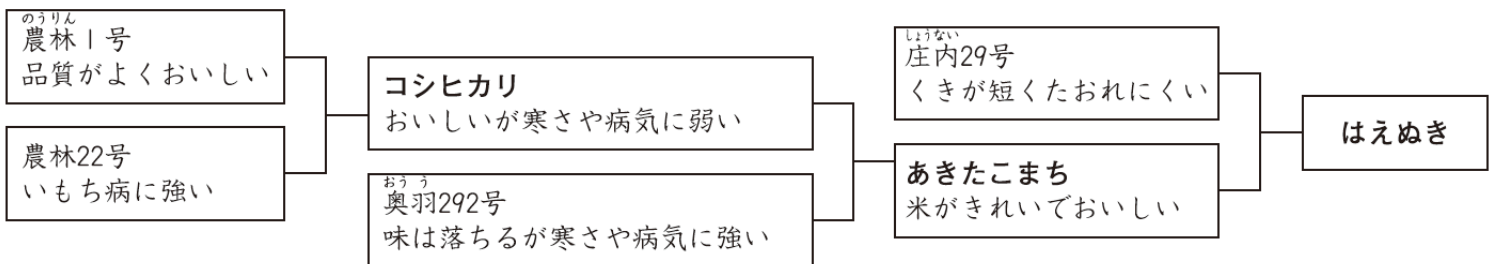
不規則な水田を一定の広さや形につくりかえること。農道を広げたり、用水路や排水路を整えたりする工事を行い、大型の農業機械が使えるようにする。

3 技術の開発と向上

<品種改良>

土地の性質や気候に合う品種、味のよい品種をつくるため、ちがう品種をかけ合わせて新しい品種をつくり出すこと。

品種改良の例



<新しい栽培技術>

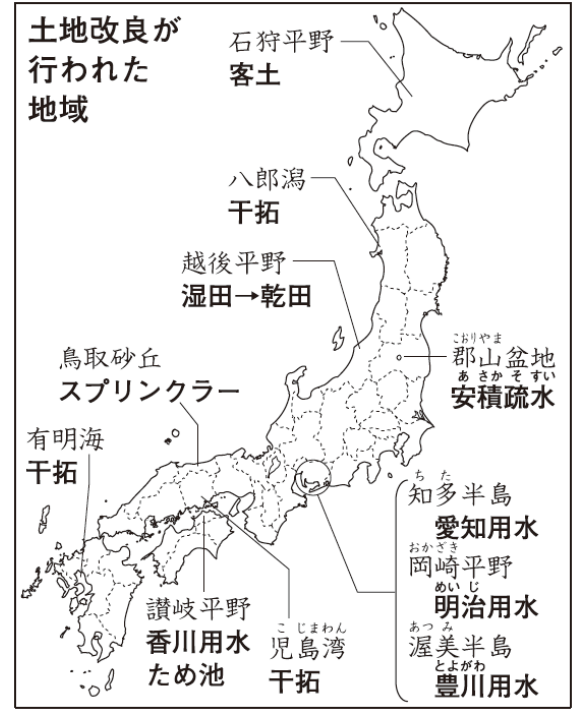
温度の調節や給水などを自動化した育苗センターで苗を育てる。また、土を使わず、肥料をとかした水で育てる水耕栽培も進められている。

<肥料>

ちっ素、リン酸、カリなどの化学肥料はききめは強いが、使いすぎると土の力がおとろえてしまうので、たい肥を使った有機栽培が見直されている。

<農薬>

病気や害虫を防いでくれるが、大量に使うと人間の体や環境に悪いえいきょうを与えると心配されている。



5 日本の農業の特色

1 日本の農業の特色

<せまい耕地>

日本の国土の約70%は山地になっていて、平地が少ないため、国土にしめる耕地面積の割合は12%と小さい。その上、工場や住宅などの市街地の面積が広くなり、農地がつぶされ、耕地面積がへっている。

<規模の小さい農家>

日本の販売農家一戸あたりの耕地面積は平均2ヘクタールと小さく、経営規模が小さい。これは、アメリカの75分の1程度しかない。また北海道をのぞく都府県では1ヘクタール未満の農家が、全体の55%をしめている。

<増える兼業農家>

農業だけで生活している専業農家と、農業のほかにもいろいろな仕事をしている兼業農家があり、最近ではほとんどの農家が兼業農家となってきている。

<集約的な農業>

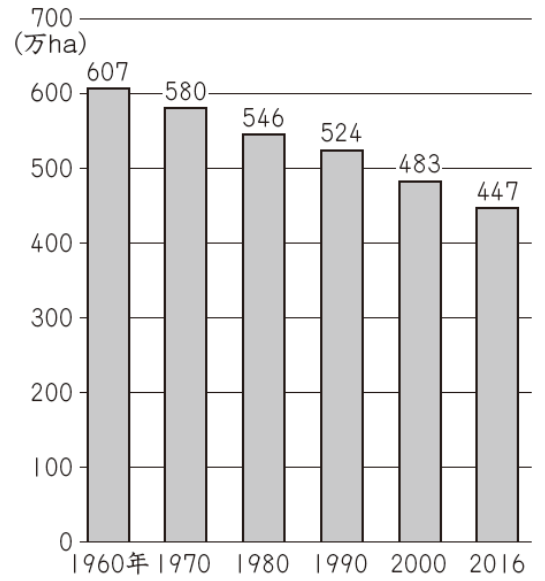
米づくりが終わった田に、冬作の小麦や野菜をつくったり、夏作の野菜を取り入れた畑に冬作の作物を作ったりして(二毛作、多毛作)効率的に耕地を使い作物を作るようにしている。

日本では多くの人手や手間をかけることや、農作業の効率化、化学肥料・農薬の投入などによって、せまい耕地から多くの収かくをあげている。このような農業を集約的農業という。1ヘクタールの生産高は、ほかの国々と比べても高い方である。

<稲作が中心>

日本では米が主食であること、気候が適していることなどから、稲の作付面積が大きい。

耕地面積の変化



(2017年版「日本のすがた」より)

2 日本の農業の問題点

①農業に従事する人の数も農家の数もへってきており、特にわかい人の割合が少なくなっている。そのため、農業で働く人の高齢化が進んでいる。

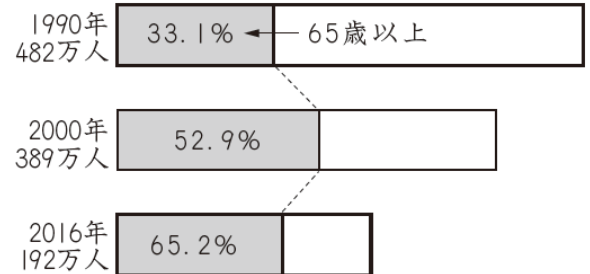
②農業機械や化学肥料などにかかる費用が高つくため、最近では機械の買入れや農作業の共同化がはかられている。

③多くの生産費がかかるので、外国の農産物よりも値段が高くなってきている。

④日本の食料全体の自給率は約40%で、外国とくらべて低くなっている。

農業人口と高齢化

[農業就業人口(販売農家)]



(2017年版「日本のすがた」ほかより)

6 日本の水産業

1 さかんな水産業

日本は世界の国々の中でも水産物の消費の多い国である。漁かく量も以前よりもへってきているが、今も世界有数の漁業国である。

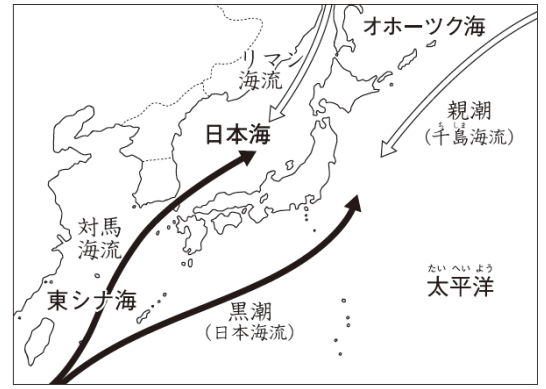
2 水産業がさかんなわけ

①まわりを海で囲まれており、長い海岸線があるため、よい漁場にめぐまれている。

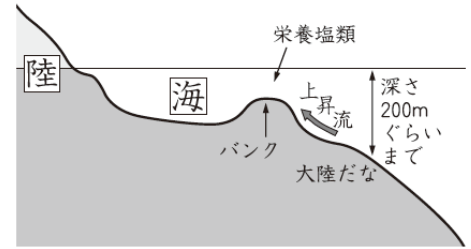
②近海には寒流（千島海流・リマン海流）と暖流（日本海流・対馬海流）が流れている。リアス式海岸が見られる三陸海岸沖は、暖流の日本海流（黒潮）と寒流の千島海流（親潮）がぶつかって潮目がつくられる。潮目にはプランクトンが多く、集まる魚の種類も多い。

③東シナ海を中心に、水深約200メートルくらいまでの大陸だなが日本近海に広がっていて、よい漁場となっている。大陸だなには魚のえさとなるプランクトンが多い。

日本の漁場



大陸だな



3 いろいろな漁業

<沿岸漁業>

海岸近くの海で、日帰りで行われる漁業で、小型漁船を使って行われる。

<沖合漁業>

おもに海岸から80～200kmほどの沖合いで、10トン以上の漁船を使って、数日かけて行われる。漁業協同組合や漁業会社の単位で行われるようになった。

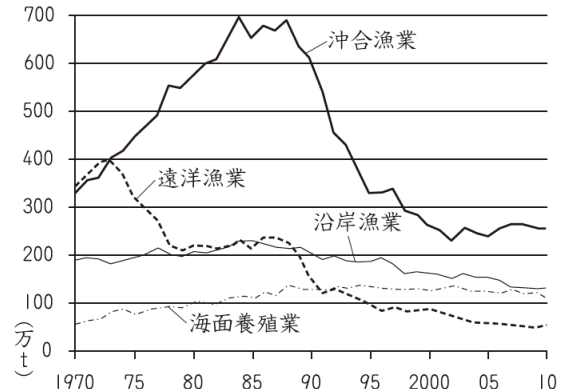
<遠洋漁業>

大型の漁船で、船団を組んで航海しながら、1週間以上かかる遠くはなれた漁場で行う漁業。遠洋漁業は1977年ごろから各国が200カイリ排他的経済水域を設定し、外国の船がとる魚の量を制限するようになったことなどから、大きく落ちこんだ。

4 おもな漁港

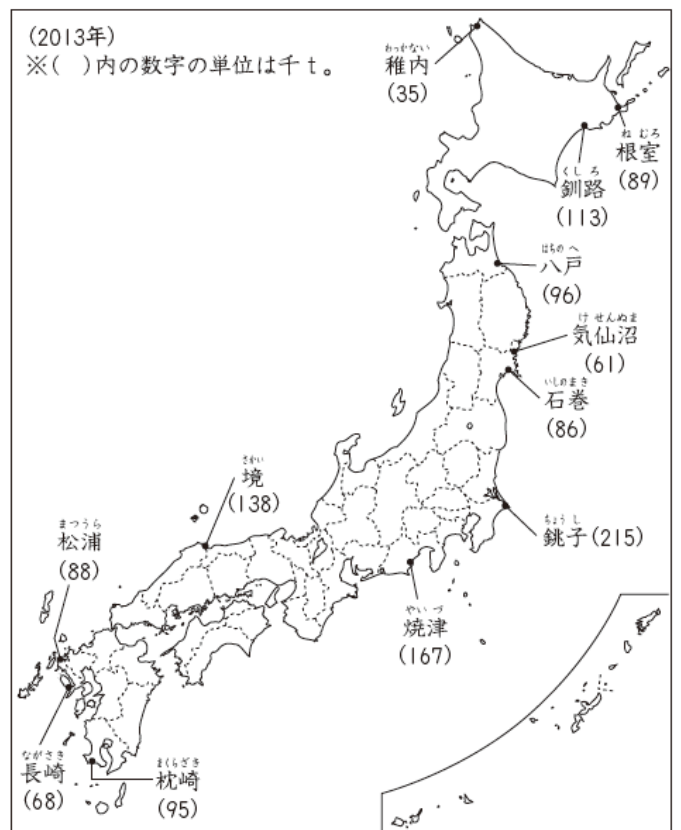
かつて日本一の水あげ量をあげていた北海道の釧路は、最近では水あげ量がへってきている。

漁業別の生産量の変化



（「数字でみる日本の100年」ほかより）

日本のおもな漁港と漁獲量

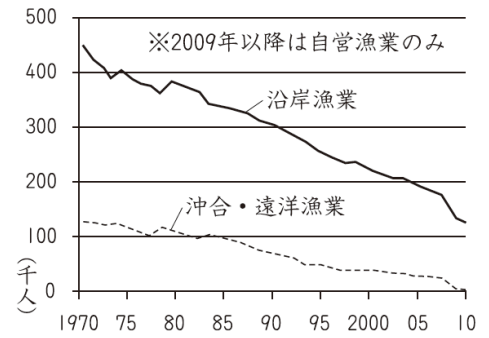


7 これからの水産業

1 漁業人口

日本の漁業人口は、年々へっていて、特に若い人の割合は少なくなっている。また、漁業だけではくらしが成り立たず、ほかの仕事をして収入を得ている兼業漁家の割合が多くなってきている。

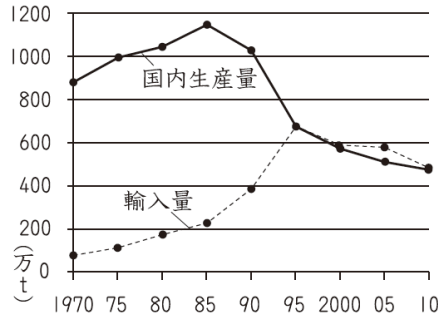
漁業別人口の変化



2 水産物の輸入

日本は世界の国々の中でも水産物の消費の多い国である。漁かく量がへったこと、ねだんが安いことなどから、外国からの水産物の輸入が大きくのびた。日本の水産物輸入額は、世界第2位である。

水産物輸入量の変化



(農林水産省統計資料より)

輸入量の多い水産物

水産物	2015年 億円
えび	2071
まぐろ	1945
さけ・ます	1918
かに	623
いか	478
たこ	403

(2016/17年版「日本国勢図会」より)

3 200海里時代をむかえて

1977年ごろから各国が200海里経済水域を設定し、外国の船がとる魚の量を制限するようになったことなどから、1970年代をさかいに遠洋漁業の漁かく量は大きく減った。

4 とる漁業から育てる漁業へ

<さいばい漁業>

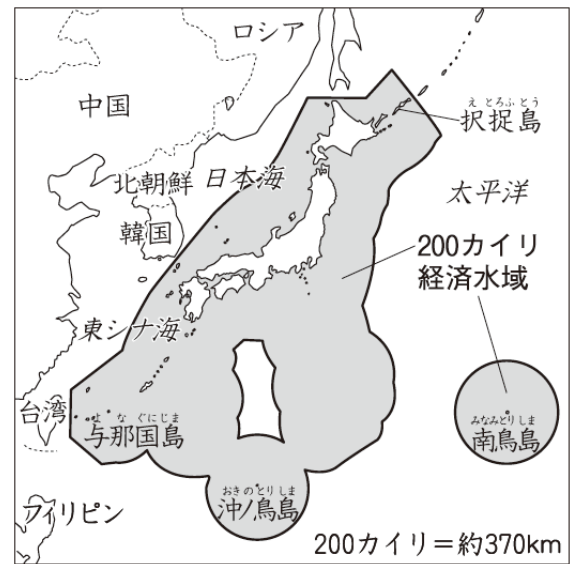
魚のたまごを人工的にふ化させて、一定の大きさの稚魚・稚貝まで育てて川や海に放流し、自然の中で育ててとる漁業。

<養しよく漁業>

波の静かな入り江などにつくったいかだやいけすで、魚や貝、海藻などを大きくなるまで育ててとる漁業。広島湾・松島湾のかき、志摩半島の英虞湾の真じゅ、陸奥湾のほたて貝などが有名である。

<きれいな海を守る>

海がよごれると水中のプランクトンが増え過ぎ、水面が赤く見える赤潮が原因で、養しよくの魚が大量に死んでしまうことがある。



真珠の養殖場 (志摩半島英虞湾)



8 食生活の変化と食料生産

1 食生活の変化

第二次世界大戦が終わったあと、日本人の生活が急速に西洋化（洋風化）するなかで、食生活のようすにも大きな変化があらわれてきた。学校給食の普及とともにパン食が増え、米の消費量がへってきた。洋風の食事が増えたため野菜の消費量も米を上回った。主食である米は、かつては農業生産額にしめる割合が最も高かったが、しだいに低下し、現在はちく産物の割合が最も高くなっている。

2 日本の食料の自給率

<食料自給率>

国内で必要とされている量のうち、どれだけの量が国内で生産されているかを割合で表したものの。

自給率が100%をこえると、その食料は余っていることになり、100%未満だと、不足していることになる。

日本の食料全体の自給率は約40%で、外国と比べて低くなっている。国内で生産された量だけで必要な量がまかなえる農産物が少なく、いろいろな農産物を輸入している。

<自給率が高い農産物>

米・野菜・いも・たまご など

<自給率が低い農産物>

だいたず・小麦 など

3 食料の確保

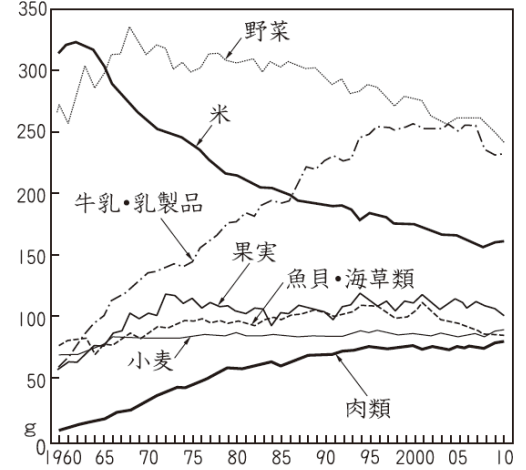
<食料の輸入>

国内で自給できない食料は、たりない分を外国からの輸入にたよっている。日本の食料自給率は低下するけい向にあり、農産物の輸入が増えている。また、外国産の安い農作物の輸入は、国内の生産経営をあっぱくしている。

<食料輸入の相手国>

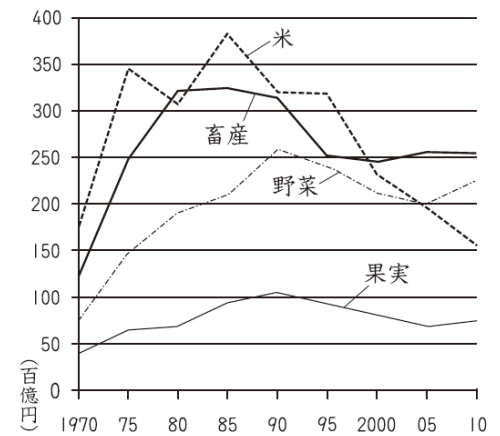
アメリカ、中国からの輸入が多い。

食料消費量の変化



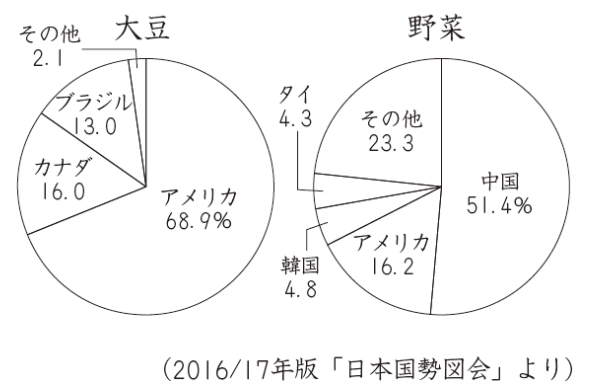
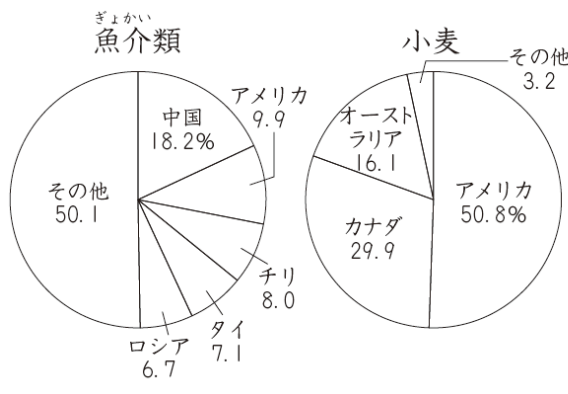
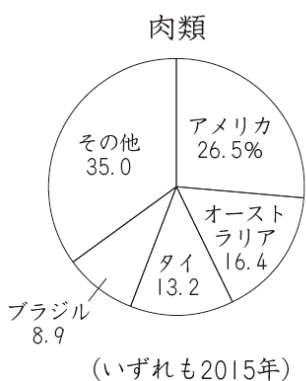
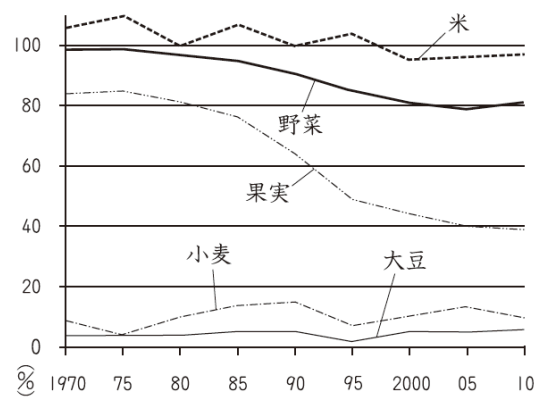
(「数字でみる日本の100年」第5版ほかより)

農業生産額の変化



(「数字でみる日本の100年」第5版ほかより)

食料自給率の変化



(2016/17年版「日本国勢図会」より)